

# 高大行政連携のキャリア形成 プログラム実践報告

松 本 幸 一

## はじめに

本稿は、キャリア形成プログラムの実践報告である。汎用的なキャリア形成プログラムは、初等中等教育から高等教育にかけ「正課」「正課外」を含め、キャリア教育として各学校内カリキュラムや行事の一部に導入されている。これらを見渡すと、モデル的なプログラムが各地でみられるなか、様々な課題も同時に散見されるようになった。そこで、この実践報告ではそれら課題のなかにあるカリキュラム関連に目を向けている。その課題に対する二つの軸として、「教育の連続性」と「女性キャリアの視点からみた男女の働き方」を主に取り上げて、教育プログラムの開発と実践を行った。

キャリア教育導入の嚆矢は、1999年12月中央教育審議会答申「初等中等教育と接続改善について」であるが、この段階ではあくまで進路指導改革の視点からみていたといわれている<sup>1)</sup>。ここでは、職業生活へ至る道筋に一貫性をもたせる、進路指導と職業教育の改革を盛り込んだ内容になっていた。高等教育におけるキャリア教育では、始めからこの延長線上に施策があったわけではなく、2011年大学設置基準の改正で教育課程や厚生補導を通じて具現化したものであった。その内容とは、社会的および職業的自立を図る能力の育成であり、端的に述べるなら労働市場への円滑な移動を目指しているものでもあった。大学等におけるキャリア教育の指導者等に向けて、厚生労働省委託事業として

キャリア・コンサルティングのツールやノウハウなど開発されてはいるが、全ての高等教育機関がその内容に準じた講義等を行っているわけではない<sup>2</sup>。つまり、後期中等教育のキャリア教育と連続性を保つことが困難だという課題がある。

キャリア教育そのものは、広義には職業キャリアとライフキャリアを含む、人生に起こるライフイベントに触れることが多い。しかし、特に高等教育における取り扱いは職業キャリアに集中し、狭義な意味としての取扱にならざるを得ない。なぜならば、労働市場側における採用方法の変化や雇用情勢の変化などが、グローバル化という要因からも影響を受けているからである。終身雇用慣行が残る日本では、女性雇用に立ちはだかる様々な課題が残されており、将来を見通す展望が抱きにくいともいわれる<sup>3</sup>。この点が解消されていないことは、1986年に施行された男女雇用機会均等法を経た現在でも、M字型カーブが残されることから明らかなことと分かる。あわせて、少子高齢化問題にも関係することであり、女性の視点からみた男女の働き方には多くの課題が残されている。

「教育の連続性」と「女性キャリアの視点からみた男女の働き方」に注目することは、現在直面している少子高齢化や総労働生産力の低下などに向き合うことであり、ディーセント・ワーク（Decent Work）を実現する意義にも適うことであろう<sup>4</sup>。また教育機関のみならず、行政とともに考えることが社会資本の蓄積や拡散にもつながる。本報告に関する取り組みは、これらの課題意識を前提としたうえで、教育と行政の横断的な連携に意味を見出すことへ力を入れている。本報告内容の流れは、プロジェクト企画の初期段階から事業化への変遷と、キャリア形成プログラムの各種成果をまとめている。

## 1. キャリア形成プログラムの始まり

本稿であつかう「キャリア形成プログラム」は、2012年11月に公益財団法人アジア女性交流・研究フォーラム<sup>5</sup>が発起人として、経年実施を重ねながら改良を続けたものである。実施に際して明示された「実施目的」を掲載するとともに、趣意について若干の説明と考察を加えたい。

核家族化や少子高齢化がすすむ現在社会において、ワークライフバランスの充実をはじめとする男女共同参画社会の実現は喫緊の課題である。そのためには、次世代への教育を通じて、男女共同参画社会の形成に寄与する人材を育成することが重要である。

そこで、KFAW<sup>6</sup>では、これから社会で活躍する学生を対象に、多様な選択の中から自分が希望する生き方や人生設計を考えるヒントとなるよう、男女の働き方や家庭生活に関する現状を学び、男女が共に活躍できる社会について考える機会を提供するためのプログラムを開発し、市内の大学生に提供していくこととする。

プログラム開発の趣意として、始めの二行にある「少子高齢化」「男女共同参画社会」が、事業を推進するうえでの問題提起に該当する部分である。少子高齢化の問題は、高齢者数に対して相対的に若年者数の減少が、労働生産力の減衰につながることが一般的に知られている。子どもを育て社会に送り出す役目は、第一にドメスティックな領域にあたる「家庭」にあるため、男女共同参画の視点から取り組むことに意味がある。さらに、社会人になる前の大学生や高校生へ講義を通して働きかけることは、各学校の職業・進路指導と相補的な役割を果たすものである<sup>7</sup>。

2012年12月には、プログラム作成連絡会議を立ち上げ、2名の学識経験者<sup>8</sup>へ概要版プログラムとマニュアルの作成を依頼している(図表1)。その後2013

年度には、先の2名を公益財団法人アジア女性交流・研究フォーラムの特別研究員に委嘱し、九州女子大学・九州国際大学・西日本工業大学でのモデル講義を開始している<sup>9</sup>。2014年度には、前年度に比べ特別研究員を1名増員し、モデル講義の対象校を2校増加させている<sup>10</sup>。これは当該年度5月に、北九州市内大学および専門学校に対して、プログラムの説明会を実施したことが参加校の増加に結びついたものである。2015年度には、さらに特別研究員を1名増員し合計4名体制としたことにともない、高等学校へのプログラム提供を開始することとなった<sup>11</sup>。2016年度には、プログラム実施の運営主管を北九州市立男女共同参画センター・ムーブへ移管するとともに、6大学9コマの講義を実施することとなった<sup>12</sup>。また、高校生向けキャリア形成プログラムを新規に企画し、自由ヶ丘高校の総合学習「リバティ・キャリアプラン」にて講義と社会人ロールモデルによるトークセッションを実施した。あわせて、コムシティひとみらいプレイスの「ひとみらい交流ウィーク」のイベントとして北九州市八幡西生涯学習総合センターと共同で、公募による高校生向けキャリア形成プログラムを実施した<sup>13</sup>。

大学での講義を始まりとして実施校数を増やしたことや、公募型企画も含め高校へと対象層を広めたことが4年間の成果である。高校への働きかけを強化することは、初めて職業形成に向けた進路の選択に直面する対象層に、キャリア形成プログラムを効果的に運用することができるだろう。なぜならば、推薦入試等によって大学に入学する学生の数が増加している現在では、在学している高校にあらかじめ決められた推薦校枠があり、この大学に決めるという成績本位の選択というリスクもあり得るからである。キャリア形成プログラムを通して、進みたい学部と社会・職業への移行との関係性を意識化することは、大学での学びの意味や意義付けを自律的に考える契機にもなる<sup>14</sup>。それでは、初めての高校との連携モデルケースとなった自由ヶ丘高校の事例について、プログラムの開発段階そして作成から実践に至る過程まで説明していく。

図表1 プログラム作成連絡会議(第1回目、第2回目、第3回目)

- |   |
|---|
| (ア) 第1回女子学生のためのキャリア形成プログラム作成会議<br>日時 2012年12月18日(火)<br>内容 プログラムのコンセプトの確認、作成スケジュールの確認      |
| (イ) 第2回女子学生のためのキャリア形成プログラム作成会議<br>日時 2013年1月14日(月)<br>内容 プログラムの詳細仕様の確認、作成の役割分担の決定         |
| (ウ) 第3回女子学生のためのキャリア形成プログラム作成会議<br>日時 2013年3月12日(火)<br>内容 プログラム(デモ版)の確認、次年度以降のプログラム試行計画の確認 |

(注) プログラム作成連絡会議は、公益財団法人アジア女性交流・研究フォーラムの会議室で行われている。会議体参加者は、北九州市男女共同参画審議会委員の湯浅委員と大島委員ならびに同法人の西本専務理事と平井広報企画課長(後に大村広報企画課長)が主にかかわっている。

## 2. 自由ヶ丘高校キャリア形成プログラム

### 2-1. プログラム形成まで

自由ヶ丘高校で実施した、キャリア形成プログラムの初案は次のとおりである<sup>15)</sup>。(一部筆者が編集した<sup>16)</sup>)

#### 1. 目的

大学の進路やその後の働き方を考えるにあたって、男女共に役に立つ情報を提供し、将来の自分の生き方や働き方を考えるきっかけとする。

#### 2. 実施要領

- (1) 実施日: 2016年9月17日(土) 8:55~10:45  
「リパティ・キャリアプラン(総合学習)の中の「進路意識を高める」」で実施
- (2) 場所: 自由ヶ丘高校 視聴覚教室
- (3) 対象: アドバンスコースおよび特進 類クラス3年生 約200名(大学進学希望者、他の進路希望者が混在している)

(4) 実施方法：50分×2コマ（講義とトークセッション）

ア 講義（50分）

【自己実現とやりがい】（25分）

講師：松本幸一（九州国際大学法学部准教授）

「働くこと」から進路を考える

- ・社会人に求められる基礎力とは
- ・なぜ大学へ行く？何を学ぶ？大学選びって？
- 課題解決、情報収集・分析、柔軟な発想の必要性
- 自己実現するための自律的思考

【現在の社会環境】（25分）

講師：山脇直祐（北九州市立大学、九州共立大学講師）

社会のリアルな課題を知ろう

- ・どんな働き方があるの？（正規雇用、非正規雇用の違い、賃金格差）
- ・少子高齢化社会の課題
- ・多様な働き方、生き方、暮らしを認め合う社会（ワークライフバランス）

イ トークセッション（50分）

【課題を見てきた社会人の体験を聞こう】進行：松本幸一

社会人ロールモデル（3名程度、若い世代の男女）

- ・候補案（大学教員の推薦がある方で、九州共立大学、北九州市立大学、九州女子大学、専門学校等自由ヶ丘高校の学生が進学を希望している学校の卒業生が望ましい）
- 公務員（行政、警察、教員）
- 企業（営業、技術、製造）
- その他（保育、介護、看護、医療、スポーツ、美容等）
- 起業（NPO、SHOP、飲食店等）

トークセッションの最終目標（高校生へのメッセージ）

社会に出るに当たって、どんな人間になっていないといけないのか。そのために、「今」何を学んでおくべきか（気付く）。

高校3年生の進路実現に向けた「社会とつながる力」を身に付けるため、自由ヶ丘高校の進路指導プログラム「リパティ・キャリアプラン」は、公益財団法人アジア女性交流・研究フォーラムとともに2016年度（1回分）に連携することになった<sup>17</sup>。自由ヶ丘高校「リパティ・キャリアプラン」とは、毎月第

1・3・5土曜日の総合的な学習の時間を利用し、実践活動を通して「課題解決能力」「コミュニケーション能力」「情報活用能力」などを育成することを目的としている<sup>18</sup>。実際には同年の9月17日(土)、3年生の特進 類クラスとアドバンスコースの生徒を対象に、出席者約150人の下で2コマ約2時間をかけた講義が実施された。1コマ目つまり前半は、「社会人に求められる力とは何か」というテーマで、様々な角度から「働くということ」「大人になるということ」について双方向型講義を行っている。2コマ目つまり後半は、当該校の卒業生を含む若手社会人を招いてトークセッションを行っている。大学の「AO入試の話」や「仕事の楽しさ厳しさ」について、ライフキャリアで直面する「恋愛や結婚」などのプライベートな話題まで、生徒と若手社会人のコミュニケーションを保ちながらトークセッションが行われた。

公益財団法人アジア女性交流・研究フォーラムとしては、高校側と連携する上で最も効果的な運営を実現させるため、高校生の進路意識調査を本番に備え高校側へ協力を依頼している。なぜならば、生徒の実態および高校が把握する課題を総合的に知ることが、連携をすすめるうえで効果的な運営法が講義へ反映されるからである。情報提供の内容は、「自由ヶ丘高校3年生進路希望調査結果(とりまとめ)」「2016年進路実績速報」の2点である<sup>19</sup>。とりまとめ生徒総数は226名で、そのうち約6割が大学進学希望で残り約4割がそれ以外になっていた。もちろん、この数字は自由ヶ丘高校全体を代表するものではなく、9月17日リバティ・キャリアプラン参加対象者のみの値である。

大学等への進学を自律的に考える契機を、この日に行われる講義やトークセッションを通して得ることが重視されていた。なぜなら進学は高校生のキャリア形成に有効であり、特に4年制大学をはじめとする高等教育機関での学びは、職業キャリアを構築する上で有意であることは一般的に理解されているからである。そのため、当該参加生徒に対して自らの頭で考え判断できる人材としてなるために、4年制大学への進学を促すことが講義素材の根底に備わっている必要があった。見方を変えれば、主体的にキャリアを考えながら大学に向

けた学習を、残り半年間の高校生活で成し遂げる意欲を涵養することでもあった。

この実践報告の先行研究として、第7回「高校生と保護者の進路に関する意識調査」が、キャリア形成プログラムを構成する上で有意な示唆を与えるものとなった<sup>20</sup>。端的に内容を解釈するならば、高校生3年生の段階で「何をしたいかわからない」層が全体の約三分の一程度みられること。それは、職業を意識した時期が遅いほど顕著にあらわれていることである。もちろん、初等中等教育の段階でインターンシップや社会人講演会など、生徒と社会の接点をつなぐ仕組みが学校教育にはある。当然ながら、生徒は個々の「好きなこと」を模索しながら、各種の活動を通して社会を知り始めるであろう。ただし、「好きだから」という理由だけで職業意識を涵養すると、それが嫌いになったときに困ることも事実である。労働市場の変化は21世紀に入り加速されているので、職業がもっている意味やその価値づけも変わるため、生徒が抱いている職業イメージは必ずしも同じものが続くとは限らないのだ<sup>21</sup>。将来それが嫌いになったり、あきたときに仕事を辞めてしまったりするのでは、「好きなこと」を基準に職業や進路を選ぶこと自体リスクがあるのだ。従って生徒が将来をイメージする上で、どのように物事を「好きになっていくのか」変化と適合のプロセスを可視化し、未来の中での仕事を考えることがキャリア形成ヒントにもなる。過去から未来へと続く個人のキャリアを見ると、若い社会人の経験は現在の生徒が学校段階で何をなすべきか、何ができるかというところから出てきた発想として有意である<sup>22</sup>。これらを念頭に入れ、主催者側である高校の意をくみ取りながら、このキャリア形成プログラムの方向性を組み立てたのである。

## 2-2. 実際のプログラム実行内容について

参加する高校生にとって、自律的に参加しているという意識を持たせるため、前半の講義と後半のトークセッションともに対話型を導入した(図表2)。講師1の役割は、高校生の進路について固定的な職業選択意識に陥らない、自分



の適性から複数の進路をイメージする方法について講演を行うことである。対話型を通して分かったことは、会場に参加している高校生が抱えている意識が、「高校生と保護者の進路に関する意識調査」とほぼ同じ傾向を示していたことであった<sup>23</sup>。9月ということもあり、AO・推薦入試などで出願が済んでいる生徒も含まれていたが、本音として将来のキャリア像を明確にできていない傾向が一部で確認された。しかし本質的な進路の選択については、これから学び続ける限り社会の変化に対応しながらできることを、この講義や後に行ったトークセッションで伝えられたものと思われる(図表3)。講師2の役割は、労働

図表2 キャリア形成プログラムの当日進行アウトライン

	講師1	講師2	若手社会人1	若手社会人2	若手社会人3
前半 1コマ 50分	対話型講演 「進路の選び方と社会人基礎力について」				
		対話型講演 「現在の(労働)社会環境について」			
後半 1コマ 50分	社会人によるトークセッション 進行と運営		社会人によるトークセッション		

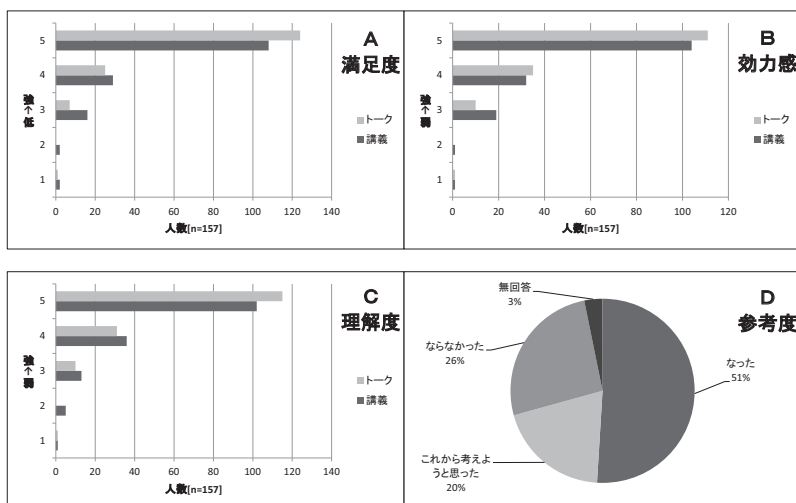
(注) 講師1と2は、注10の松本と注11の山脇が担当している。若手社会人1から3は、北九州市職員1名と民間企業社員2名が担当しており、市職員は当該高校の卒業生である。また、社会人3名はともに年齢が20代で、高校生に非常に近い年齢構成となっている。

### 資料1 自由ヶ丘高校「キャリア形成プログラム」当日の会場風景



(注) 写真左が前半の講義で、「現在の(労働)社会環境について」を解説している山脇講師の様子である。写真右が後半のトークセッションで、左二人が司会進行役を兼ねた講師であり、右三人が自由ヶ丘高校の卒業生を含む若手社会人である。なおこの写真は、自由ヶ丘高校および KFAW ホームページから許可を得て転載している。

図表3 アンケート集計結果(「トークセッション」と「講義」の対比など)



(注) アンケート結果のみかたは、前半の講義と後半のトークセッションを並列にしたものに、A「満足度」B「効力感(役に立ったか)」C「理解度」の要素別回答を掲載している。AからCまでは全て5段階評価となり、5「はい」4「ややはい」3「普通」2「やよいいえ」1「いいえ」である。Dは「将来の生き方・考え方を考えるきっかけになったか」の回答で4段階評価である(評価指標は図表3のDのみ表中に記載している)。n = 157 (all)

市場の現状とこれからの働き方について、男女共同参画の視点を入れながら対話型講義を試みることである。職業観をイメージするため、身近な話題として「テレビドラマ」などに登場する職業人像を用い、それぞれの本質的な役割を解説し生徒の理解を促している。さらに、一般的な男女のキャリアパスをこれから描く上で、どのような社会問題が横たわっているかをエビデンスに基づいた資料を用い解説している。ここで使われた資料(つまりパワーポイント)は、将来的に公益財団法人アジア女性交流・研究フォーラムホームページから、運用方法も含めた資料一式が自由にダウンロードできるか検討中である。

後半にあたるトークセッションは、自由ヶ丘高校の卒業生を含む20歳代の若手社会人を交え、司会が「準備した質問」と会場高校生からの「自由な質問」を取り入れたトークセッションを行った<sup>24</sup>。「準備した質問」とは、現在の

仕事は何をしているのか、その仕事を選ぶまでの過程について、高校時代はどのような生徒だったか、高校時代に最も力を入れたこと、その他、である。はじめは、一通り「準備された質問」を若手社会人より回答してもらう予定であったが、会場高校生から関連する（興味がありそうな）質問があれば同時に受け付けることにした（資料1）。

生徒からの質問は、前掲「準備した質問」に関することに集中しており、高校生がおかれている「悩み」「不安」を投影するものであった。若手社会人の一人は、大学時代の専門が必ずしも職業に直結しなくてもよい事例として、自分自身の経験や進路のとらえかたを話していた。具体的には、家政学部から玩具大型量販店で働くことになった経緯や、そこへ行きつくまで自分が考え経験したことに触れていた。これは、選択した進路と必ずしも強い連続性のない職種に進むことについて、高校生の知らない情報を提供できることにもなった。学問と職業の連続性に注目した、既存のキャリアパスには「資格取得」から「職業直結」というコースが根強く残っており、そのような進路のイメージに生徒側が違和感を持っていたのかも知れない。「始めて知りました」と生徒がお礼を言うあたり、同質情報があふれる世の中への不信感もあったのだろうと感じた。図表3のAからCのデータをみると、講師1と2が担当する既存のキャリアパスを含んだ講義より、若手社会人1から3が入る現実のキャリアパスが垣間見えるトークセッションの評価が高いことが分かる。

### 3. 考 察

就きたい職業によっては、高校卒業後から職業訓練を積むことによって、より高いスキルを維持しながらキャリア形成ができる場合もある。大学進学が一概によいとはいえないが、大学など高等教育卒業者に多くの求人が集まっていることも事実である。生徒自身の進路が定かでなければ、現代の産業社会では

高い知識や専門性が必要なことを理解したうえで、大学等への進学を選ぶことに意味があるのであろう。そのような考え方も入れながら、キャリア形成プログラムは「教育の連続性」と「女性キャリアの視点からみた男女の働き方」の視点から、教育プログラムの開発と実践を行ってきた。生徒や学生が置かれる将来においては、数年の単位で労働市場の変化など目に見えた好不況が訪れる可能性がある。つまり、職業形成に向けた高校生や大学生の意識啓蒙に対して、成功体験のロールモデルを提示したキャリア教育では対応が難しくなりつつある<sup>25</sup>。さらに、若年層が抱いている進路の悩みとは「何をしてもよく分からない」という、指導者側にとっても対応法に苦慮するケースが多いと指摘されている<sup>26</sup>。様々な課題に対応する、新たなキャリア形成プログラムはどう開発し評価されていくのであろうか。そこで、今回自由ヶ丘高校で実施した講義やトークセッション全体に対する、生徒側の意識調査について簡単に考察を試みたい。

意識調査は自由記述形式で取りまとめたが、共通するテーマを包括すると「大学生活」「大学受験」「講師・パネリスト」「働き方」「ジェンダー」「その他」の、6つのカテゴリーに分類されている。「大学生活」「大学受験」が最も生徒からの自由記述が多く、「大学生活が楽しいという話を聞くことができ、大学に行きたいという気持ちが強くなった」と回答している。そこで、「最も印象に残った話は何ですか」のなかから、複数回答があった生徒の意識調査結果を抜粋し次にまとめる<sup>27</sup>。

**【大学生活】**

- ・大学が楽しいという話（安心した／大学に行きたいと思った）
- ・特待生なら学費が安くなる

**【大学受験】**

- ・AO 入試の話（受験内容／面接のとき相手が何を受験生に求めているのか）
- ・進路に悩んだ話（進路には色々な選択肢があること／親との意見相違によるケンカ）
- ・大学に入るきっかけ

【働き方】

- ・派遣社員と非正社員の違い（日ごろから疑問に思っていたことが解決した）
- ・大学進学後の将来の考え方

【ジェンダー】

- ・男女の賃金の差が結構あることに驚いた（世界の男女賃金格差 / 女性の給料が低いこと）

【講師・パネリスト】

- ・自分が将来やりたいと思ったことを親に反対されても、貫き通して実現できた話

【その他】

- ・恋愛（高校時代 / 大学時代）

（注）パネリストとは、若手社会人のことを示している。【その他】にある恋愛については、他の項目を超える量の反応が確認された。また、トークセッションのときにも「話題」として盛り上がったものとは確かである。

「大学生活が楽しいという話」とは、授業の受け方や単位のとり方はもとより、ボランティアやアルバイトのことまで包括された内容であった。これらの話題一つ一つは、インターネット情報など各メディアを検索し知ることができるものだが、社会人が「わたしでもできたこと」だから大丈夫と後押しすることの意味が大きかった。これは、進路選択を肯定的にとらえることができない、高校生の胸の内を明らかにしている可能性もある。進路を考えることは、将来の就業観を涵養しながら「楽しい未来」を描くのではなく、大変な社会に入っていくとき避けて通りたい話題なのであろう<sup>28</sup>。将来へ向かっていくにあたり、大学等で学び続けることがその展望を広げることになる。また、選択肢の増やすことや進路を変えていくことも可能であることは、「不安で身動きがとれない」高校生には有効な講義・トークセッションであっただろう。

## おわりに

若者の就職が難しくなった背景には、労働市場の変化つまりグローバル化に加え、大学の進学率が高くなったことにも一因があるだろう。高卒から労働市場への入り方は、担当教諭がほぼマンツーマンで生徒の進路指導から企業への紹介まで、生徒側が仮にパッシブな状態でもある程度機能していた。中小企業を中心に、高校側は固有の企業情報を従業員や卒業生より得ることができ、高校生の情報を知る教員は情報の非対称性に悩まされることも少なかったのだろう。しかし、高等教育機関では基本的に学生の就職活動はアクティブが原則であり、就職情報が入りやすい大企業等に希望が偏ることになる。すなわち、優良とされている中小企業の情報に学生がアクセスする前に、学生自身が疲れてしまい就職活動を休止してしまう現状も垣間見える。これらをみている範囲では、高卒労働市場に備わっていた制度的連結が、大卒労働市場にむけ機能変遷し切れていないと考えることもできる<sup>29</sup>。また、企業側も仕事や福利厚生の実態を十分開示しないなど努力不足が否めず、パッシブな学生との雇用のミスマッチを解消できずにいるのであろう。

ところで、学校側と企業側を結びつける制度的連結を、高等教育機関で組織的に運用できたという報告を知ることではできなかった。つまり大学等での就職指導は、アクティブ型学生を一括して合同説明会等に参加させるほうがよいのか、パッシブ型学生を企業に送り出すために制度的連結を強化すればよいのか明らかにされていないのである<sup>30</sup>。学校から職業への移行は、若年者雇用が顕在化する高卒時に生徒への意識化が有効であり、本報告で示したキャリア形成プログラムは一定の意義があったものと思われる<sup>31</sup>。さらなる議論とともに、各方面からの指摘を受けつつプログラムの改善普及に努めていきたい。

なお、本稿を作成するに当たり各方面から資料提供や情報提供をしていただいた。公益財団法人アジア女性交流・研究フォーラムの大村昭子企画広報課長

には、プログラムの企画から運用さらに資料提供まで大変お世話になった。また、同法人の西本祥子専務理事のご支援にも恵まれた。学校法人福原学園自由ヶ丘高校の秋末豊成先生には、高校側からの打ち合わせや当日の運営まで一切を切り盛りしていただき、本稿に掲載する写真なども快くご提供くださった。この講義と一緒に進行させ、また支えてくださった山脇直祐先生へもお礼を申し上げます。最後に、この運営を支えてくださった若手社会人の方々も含め、様々なサポートを下された全ての関係者へ深くお礼を申し上げる。

## 注・参考文献

- 1 村上純一「中教審「接続答申」における「キャリア教育」の意味」『東京大学大学院教育科学研究紀要』50巻、2011年、PP 322 323 を参照した。
- 2 厚生労働省 HP「大学等におけるキャリア教育プログラム」[http://www.mhlw.go.jp/stf/seisakunitsuite/bunya/koyou\\_roudou/shokugyouounouryoku/career\\_formation/career\\_consulting/career\\_kyouiku\\_programs/index.html](http://www.mhlw.go.jp/stf/seisakunitsuite/bunya/koyou_roudou/shokugyouounouryoku/career_formation/career_consulting/career_kyouiku_programs/index.html) を2017年1月4日に参照した。
- 3 原田順子『多様化時代の労働』放送大学教育振興会、2010年、PP 86 88 を参照した。
- 4 1999年の国際労働機関（ILO）総会において、当時の事務局長ファン・ソマビア氏から提出された報告書に初めてディーセント・ワークが用いられ、ILOの活動の主目標と位置づけられるようになった。ディーセント・ワークとは、権利が保障され十分な収入を生み出し、適切な社会的保護が与えられる生産的な仕事を意味する。
- 5 公益財団法人アジア女性交流・研究フォーラムとは、北九州市内を基盤とした公益事業を推進する団体である。主な公益事業は、日本及びアジア地域のジェンダー問題に関する調査研究、国際交流等を通じて女性の地位向上を図ることである。そして、北九州市立男女共同参画センター・ムーブに加え、北九州市立東部勤労婦人センター（レディスもじ）および北九州市立西部勤労婦人センター（レディスやはた）の管理運営等を指定管理者の立場を通して行っている。
- 6 KFAW とは、公益財団法人アジア女性交流・研究フォーラム英語名称であり、Kitakyushu Forum On Asian Women の頭文字にあたる。
- 7 初等中等教育や高等教育での職業・進路指導は、主に教員や学校職員などが生

徒・学生の指導にあたるため、学校以外で働く者からの情報提供が少なくな  
ざるを得ない。学校側からのニーズが何であるか、入念な打ち合わせと企画提  
案を重ねながら、学校教育の補完的な役割を果たすことに特徴がある。

- 8 2名の学識経験者は、情報セキュリティ大学院大学の湯浅壘道教授と九州女子  
大学の大島まな教授であり、両名ともに北九州市男女共同参画審議会委員でも  
ある。
- 9 九州国際大学では、公益財団法人アジア女性交流・研究フォーラムの太田主任  
研究員（当時）が講師として、その任にあたっている。九州女子大学へは湯浅  
教授が、西日本工業大学では大島教授が講師として、その任にあたっている。
- 10 特別研究員として九州国際大学の松本幸一准教授が新たに加わり、参加大学と  
して西南女学院大学と九州共立大学が新たに加わっている。
- 11 特別研究員として北九州市立大学の山脇直祐（非常勤）講師が新たに加わった。  
高校向けプログラムの開発準備にとりかかり、当該年度で福岡県立若松高校に  
てデモンストレーション型の講義を実施している。次年度つまり2016年度には、  
自由ヶ丘高校（北九州市八幡西区にある学校法人福原学園）で連携講義を行う  
ことが決まった。
- 12 2016年度キャリア形成プログラム実施は、「西日本工業大学」（1）「西南女学  
院大学」（2）九州共立大学（2）九州女子大学（1）九州国際大学（2）北九  
州市立大学（1）の6校（9コマ）で行われた。
- 13 コムシティ（COM CITY）とは、「八幡西生涯学習総合センター」などの公共  
施設および民間商業施設が同居する官民複合施設である。その他として、「八  
幡西区役所」「西部市税事務所」「ハローワーク八幡コムシティ庁舎」「西部整  
備事務所」など入居しているため、合同庁舎的な機能をあわせてもっている。所  
在地は、福岡県北九州市八幡西区黒崎3丁目15-3にあり、JR 黒崎駅に隣接し  
ている。当該地にある八幡西生涯学習総合センター2階204会議室にて、「2016  
年度 気ままにセミナー（11月12日）「なりたい自分をイメージしよう～高校  
生のための未来へつながる自分探し～」を実施している。実施概要については、  
公益財団法人アジア女性交流・研究フォーラム HP にて確認できる。[http://www.kfaw.or.jp/report/cat\\_148/28.html](http://www.kfaw.or.jp/report/cat_148/28.html) を2017年1月13日に参照した。
- 14 中央教育審議会キャリア教育・職業教育特別部会「後期中等教育段階における  
キャリア教育・職業教育の充実方策について（審議をまとめるに当たっての方  
向性）」を参照した。
- 15 初案作成者は、公益財団法人アジア女性交流・研究フォーラムの大村昭子企画  
広報課長である。
- 16 ほぼ原案に近い資料が2種類あったため、事実に基づいて筆者の責任でまとめ



なおしてある。また、暦年は西暦で統一させた。

- 17 リバティ・キャリアプランについては、自由ヶ丘高校 HP を参照した。そのなかで、卒業生の講演という項目があり、若手社会人に卒業生をコミットしたことがと符合している。http://www.jiyugaoka-hs.ed.jp/?cat=29を2017年1月7日参照した。
- 18 前掲 HP http://www.jiyugaoka-hs.ed.jp/?cat=29を2017年1月7日参照した。
- 19 「自由ヶ丘高校3年生進学希望調査結果(とりまとめ)」は、調査対象総数が226名で「就職」「大学」「短大」「専門」「未定・その他」の5項目に分類されている。「2016年進路実績速報」は、当該年度3月3日まで集計の大学名と延べ合格者がまとめられている。具体的な数値は「部外秘」のため、ここでは掲載をしない。
- 20 一般社団法人全国高等学校 PTA 連合会第7回「高校生と保護者の進路に関する意識調査」2015年報告書を参照した。
- 21 森博嗣『「やりがいのある仕事」という幻想』朝日新聞出版、2013年、第1章を参照した。
- 22 学校法人河合塾「シリーズキャリア教育(第1回)いまなぜキャリア教育が求められているのか」『Guideline(ガイドライン)』2011年4・5月合併号を参照した。
- 23 前掲注22の資料を参照しているが、文部科学省「キャリア教育・職業教育特別部会(第18回)配布資料」のなかに、筆者が注目した同一のデータが採録されている。
- 24 当日に登壇した若手社会人は、プログラム初案段階の候補者から若干変更がなされている。候補者の日程調整によるものであるが、この構成メンバープログラム初案の趣旨を変えるものではない。また、司会は主に講師1が担当した。
- 25 労働市場の変化が多くなったことから、若年層の就業困難に加え中高年層の継続雇用困難まで、様々な雇用市場のミスマッチが起きようになった。厚生労働省委託事業として、一般社団法人人材サービス協会が「キャリアチェンジのための汎用的スキルの把握方法の検討及びキャリア・コンサルティング技法開発等」を実施していることも、雇用情勢の変化への対応事例として注目されるものである。
- 26 文部科学省「キャリア教育・職業教育特別部会(第30回)配布資料」のなかに、約31%の大学1年生が高等学校卒業以前に職業を意識したことがない」と指摘したデータが掲載されている。また同部会(第29回)配布資料のなかに、進路選択に関する高校生の気がかりな事項として、「自分に合っているものがわからない」「やりたいことが見つからない」が共に30%台で上位3位内に入ってい

る。

- 27 この資料は、公益財団法人アジア女性交流・研究フォーラムの大村企画広報課長から提供いただいたものを、筆者が一部抜粋してまとめなおしている。表現など一部変えているところがあるが、それら内容は全て筆者自身の責めに負うものである。
- 28 文部科学省「キャリア教育・職業教育特別部会（第29回）配布資料」のなかに、「進路を考える時の高校生の気持ち」というデータがあり、高校生全体の約74％は「自分がどうになってしまうのか不安」など否定的な意見が示されている。
- 29 石田賢示「学校から職業への移行における「制度的連結」効果の再検討」『教育社会学研究』日本教育社会学会、第94集（2014年）P. 327を参照した。
- 30 前掲、PP. 340-341.を参照した。
- 31 前掲、P. 339を参照した。